

第五章 栗野の民俗

「民俗」とは、地域社会で伝えられてきた習慣や風俗、伝説、衣食住に関わる生活様式のことです。栗野にも山やムラ、マチに住む人びとの生活の中で紡がれてきた地域特有の民俗があります。

例えば麻づくりにおいては種まきや刈り取りの区切りに行う祝いの行事があり、また労働の合間には獅子舞や地芝居じしばいなどの芸能が催され、人びとに束の間の安らぎを与えました。

民俗を知ることが、それらを守り伝えてきた昔の人びとの心を知ることにもつながるでしょう。



▲賀蘇山神社関白流獅子舞（尾ざく）

麻に関わる信仰や習俗

●麻の呪力

麻は成長が早く、種をまいて約九〇日で二〜三mの高さに達します。またその繊維は軽くて強靱、光沢がありしなやかという特質を持っています。こうしたことから麻には特別な呪力が宿ると信じられ、昔から神事や人生儀礼などに用いられてきました。

神社で使うお祓いの用具である「大麻（おおぬさ）」や注連縄にも、穢れを祓い聖域の境とするため麻が用いられています。また、最高位の力士が締める横綱はその体内に宿る力を象徴するものといえますが、この横綱には野州麻が多く用いられています。

粟野では赤ちゃんが生まれるとのへその緒を縛って切り離すために麻系が用いられた他、生まれて七日後に便所にお参りする「セツチン参り」では、麻殻の箸で糞を摘んで赤ちゃんに食べさせる真似をしました。また、赤ちゃんが身にまとう産着の麻の葉模様は真っ直ぐに育つ麻にあやかっただけのものと考えられません。昔は乳幼児の死亡率が高かったため、麻の神聖な力を頼り子どもの健やかな成長を願ったのでしょう。

●「梵天あげ」

野州麻の生産地域では、麻の栽培や生産に関わり独特な風習や信仰が生まれました。麻の種まき後に行われる「お天祭」もその一つです。天候順調や五穀豊穡を太陽や月の神様に願う天祭行事は県内各地に見られ、天棚という屋台を組んで行うものや、仏教信仰と結びついた「天念仏」など、さまざまな形態があります。

麻は茎が細く突風や雹によって折れてしまうと良質な繊維が得られなくなるため、種まき後の天候順調は麻農家にとって切実な願いだったのでしょう。粟野で行われたお天祭の多くは、「梵天あげ」を伴うものでした。「広報あわの」（昭和五八年五月号）で紹介された入粟野の出口集落における梵天あげの事例を見てみましょう。

四月上旬のお天祭の当日、各地区からの参加者が、梵天や青竹、赤飯や酒等を手分けして持ち、地元ハナント山（波奈能登夜、標高約六〇〇m）の頂上を目指します。藁束に幣束を差し鉋屑等で飾



▲ハナント山（中粟野遊の郷付近から）
奥に見えるのがハナント山。

り付けた梵天は神様を迎える目印とするもので、「目立つもの」という意味の「ホデ」に由来するといわれています。青竹の先に取り付けられた梵天は、天の神様が分かるように山頂のヒノキにしっかりと結び付けられました。下山後は、当番の家や公民館に集まって「オヒマチ」のお祝いとなります。「日待ち」は本来、特定の日に集まっておこもりし日の出を待つ行事ですが、いつしか仕事を休んで会食する日の意味合いが強くなっていました。また、このとき雷除けに靈験のある群馬県板倉の雷電神社に代参した人から各農家が雷除けのお札を授かります。このお札を竹竿の先に挟んで麻畑に突き刺し、天候順調を祈願しました。

地元の人によると、梵天あげは参加者の高齢化に伴い登山が負担となったため三〇年前位から行われなくなったといっています。

麻の種まきや麻引きは、親戚の手伝いや労働者を雇って行う大変な仕事でした。麻の収穫作業が終わった後には「アサヒキイワイ」というお祝いがあり、手伝ってくれた人たちを招待してうるち米をついた「バンダイモチ」を小豆餡あずきあんでくるんだものや芋の煮物などのご馳走が振舞われました。

野州麻の生産は、技術者や生産者たちの努力による品質向上や技術改良に支えられていましたが、一方でこうした信仰や助け合い、忙しい最中のレクリエーションなどが、麻農家にとつ

て明日の作業に望む精神的な拠り所となったのかもしれない。

《参考文献》

柏村祐司・篠崎茂雄『野州の麻と民俗』随想舎、二〇二四年



▲精麻せいま

野州麻を加工し繊維としたもの。規格に沿った束にして保存し、適当な時期に仲買人に売却する。

粕尾の札所

人々が信仰のため聖地や霊場を巡り礼拝することを巡礼といっています。現在では「聖地巡礼」といえばアニメや漫画に登場する縁の地を巡ることを指すこともあり、ファンであればどんなに遠くであってもそこに向かう努力は惜しまないでしょう。昔の人も同じく、日常を離れ神仏の計り知れない力である霊験を得るため各地の霊場を目指しました。

●札所巡りの信仰

奈良時代から観音信仰が広がり、平安時代には貴族たちによる京都近郊の観音霊場への参詣が盛んになりました。また同じ頃四国三十三箇所巡りが行われるようになります。これは畿内や周辺三十三カ所の観音霊場を巡礼するもので、観音菩薩がこの世を救うため三十三の姿に変化したという『観音経』の所説に基づくとされています。霊場は一般的に「札所」と呼ばれています。参拝した記念に自分の名前を書いた「納め札」（千社札）をお寺に納めたことに由来します。

西国三十三観音巡礼が盛んになると、武士などの有力者たちは西国札所の霊験を分けてもらう勸請によって自分たちの居住する周辺に新たな札所を設けました。こうして「西国写」の霊場として、「坂東三十三観音」や「秩父三十四箇所」が、鎌倉

時代から室町時代に掛けて成立します。江戸時代になると、西国・坂東・秩父を合わせた「百観音巡礼」が広がり、百カ所全てを巡拝すると大きな功德が得られると信じられました。こうした「西国写」の札所は栃木県内各地にも広がり、郡や村、寺の境内地を範囲とする札所が作られました。

●粕尾三十三番札所

粕尾にある三十三カ所の札所も西国三十三観音の写しであり、危険を伴う長旅に行かなくても近辺に巡礼地を設定することで霊験を得られるようにした昔の人の知恵ともいえます。

粕尾の札所の発祥はよく分かっていません。札所に当たるお堂に残された観音像の墨書きや地元の言い伝えによると、昔、上粕尾の有力者が西国三十三カ所から勸請された観音像を三体ずつ一つのお堂にまつたことが始まりといわれます。昭和七年（一九三二）、旧粕尾村によって編さんされた『粕尾村地誌』には、古文書を引いて天文二年（一五五二）上粕尾の高橋治部少輔吉久が上粕尾北村より発光路村に一つのお堂を建立し一箇所三箇所ずつ観音像を奉納したと記されています。当初上粕尾だけにあったお堂が江戸時代に中粕尾・下粕尾まで拡大し現在の三十三箇所の札所が成立したと考えられています。

粕尾には百観音巡礼が無事終わったことを記念して建てられた供養塔が複数残っています。粕尾の郷土史家・柏崎正一は、

当時庶民が百観音巡礼するのは難しく、粕尾の札所を百観音に見立てて巡拝したことを記念し建立されたものではないかと推測しています（「広報あわの」昭和六〇年四月号）。

江戸時代には「御陰参り^{おかげ}」のように庶民にも物見遊山^{ものみゆざん}を兼ねた参詣の旅が広がりましたが、山間地であった粕尾の人々にとっては、遠方の地に向かうハードルは、より高かったのかもしれない。ともあれ、四〇〇年を超える古い信仰が地域の人たちによって守られ現在までその姿を留めるのは大変貴重なことといえるでしょう。



▲第九番上の内札所（栢原）

《参考文献》

柏崎正一 『粕尾の札所』 栗野町教育委員会、一九八五年

16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	札所番	
堀之内	極楽寺	上の道	宇都野	東福寺	竜栄寺	大沢	上の内	上井戸	西上	常楽寺	東上	竜沢寺	古内	自性院	録事堂	俗称	
北村	大越路	森	北村	森	加戸、笠丸	発光路	栢原	発光路	大井	大越路	発光路	堤洲	第八区	松崎	大越路	所在地	
33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	札所番
芝原	松ノ木	塩沢	栢原	正蔵院	東光寺	茂手	慈眼寺	下ノ道	二ツ堂	馬置	上ノ堂	細尾	小川入	宿世木	中禅寺	遠木	俗称
布施谷	栢原、細尾	堤洲	栢原、細尾	大井	北村	茂手	布施谷	森	布施谷	馬置	発光路	細尾	布施谷	細尾	大越路	遠木	所在地

▲粕尾三十三番札所一覧

粟野の獅子舞

祭りの日には村人たちが集まり様々な芸能を奉納し神仏と共に楽しみます。これら庶民によって長い間育まれ受け継がれてきた民俗芸能の一つに、お正月や祭りに登場する獅子舞があります。

獅子舞は獅子の頭を模した被り物や衣装を身にまとい、囃子に合わせて舞い踊る民俗芸能です。獅子舞のルーツは飛鳥時代に中国から伝来した伎楽や、室町時代に流行した「風流（踊り）」にあるといわれ、日本で最も多い民俗芸能といわれています。獅子舞の「シシ」とは、「獅子」であると共にカモシカやシカ、イノシシなどの獣全般のことを指します。獅子舞にはこうした野生動物の持つ生命力によって邪悪なものを祓う意味が込められていたのでしょうか。

●粟野の「三匹獅子舞」

粟野には、市の指定文化財になっている「小松神社天下式関白流獅子舞」「賀蘇山神社関白流獅子舞」「尾出山神社関白流獅子舞」の三つの獅子舞があります。獅子舞には、二人以上で一匹の獅子を演じる伎楽系の二人立と、一人で一匹を演じる風流系の一人立がありますが、粟野の獅子舞は全て一人立の獅子舞が三人一組で演じる「三匹獅子舞」です。

三匹獅子舞は雄二匹・雌一匹で構成され、羽飾りを付けた獅子頭を被り腹部に付けた太鼓を打ち鳴らしながら舞い踊ります。獅子以外にはヒョットコやオカメ面を付けたユーモラスな道化役が登場します。三匹獅子舞は関東を中心とした東日本に広く分布しており、栃木県では一〇〇力以上が確認されています。

●「小松神社天下式関白流獅子舞」

小松神社天下式関白流獅子舞は、一〇月第三日曜日に行われる小松神社（久野）の秋の例祭に奉納されます。「久野の獅子舞」とも呼ばれ、おが屑を敷いた舞台で舞われる演目には「平庭」や「笹がかり」、「弓くぐり」があり、ササラという楽器を演奏する道化役・ササラコキの所作も見所です。残された古文書は、江戸中期の文政一〇年（一八二七）に伝来したことが記載されており、村人の手により一子相伝で傳承されてきたといわれます。

また、安生順四郎（あんじょうじゅんしろう）の仲介によって、明治三三年（一九〇〇）に子爵・大鳥圭介から「関白流天下式」の真筆の幟の奉納があり、今でも大切に保存されています。

●「賀蘇山神社関白流獅子舞」

賀蘇山神社関白流獅子舞は、賀蘇山神社の秋の例祭（九月二三日）に奉納され、俗称「尾ざく山の獅子舞」と呼ばれ、

尾ざく・下五月坪しもさつつきの二流があります。

前座的芸能として、芸能化した杖術じょうじゆじゆがついています。

地元の言い伝えによると、この獅子舞は日光の四本竜寺建立のときに、地鎮祭じちんさいに招待されて舞ったのが始まりといわれ、現在使用している「菊と桐と木瓜の紋入りの旗」もこの時に賜ったものといわれています。

●「尾出山神社関白流獅子舞」

尾出山神社関白流獅子舞は、上永野の尾出山神社祭礼(毎年一〇月一〇日に近い日曜日)に奉納されます。

演目は、「初庭」「中庭」「三の庭」。舞は、「庭見」「花カゴまわり」「弓くぐり」があります。なかでも獅子が弓をくぐる際には観客から喝采かっさいが上がります。

由緒ゆいしょとして、文久二年(一八二六)に書かれたとされる獅子舞解説の巻物が伝わっています。

《参考文献》

稲村行真『ニッポン獅子舞紀行』青弓社、二〇二四年
飯塚好『三頭立て獅子舞 歴史と伝承』おうふう、二〇一三年



左：賀蘇山神社関白流獅子舞
(下五月坪)
中：小松神社天下式関白流獅子舞の「ササロキ」
右：尾出山神社関白流獅子舞の「弓くぐり」

双体道祖神と石造物に込めた祈り

石塔や板碑、お地藏様、馬頭観音、道祖神、庚申塔……。道端や草むらに佇む石造物を皆さんも見たことがあるでしょう。昔の人は、信仰の証や記念として、固くて丈夫な石を彫り上げた石造物を村境や峠等の要所に立てました。今に残る石造物は、身近にあって地域の歴史や文化を知ることのできる貴重な資料なのです。

●粕尾の双体道祖神

外部から訪れる悪霊や疫病を防ぐ神様として、村境の入口等に立てられた「道祖神」は、塞神、岐神、道睦神とも呼ばれ、各地で庶民の信仰を集めてきました。道祖神は、自然石を神体とするものや、「道祖神」の文字を刻んだもの、男女二神像など、その形態は様々です。男性器をかたどった道祖神もあるように、生殖器崇拜と結びつくことで、子孫繁栄から五穀豊稔の神ともされました。

粟野にも「ドウロクジン」と呼ばれた道祖神信仰がありました。ドウロクジンは、耳だれ（耳から膿が出る状態）を治してくれる神様として、穴をあけた石に糸や麻を通してお供えすることがありました。また粟野には県内でも珍しく、上・中粕尾を中心に八体もの「双体道祖神」が残っています。双体道祖神

は、男女二神が抱き合う姿や、ひょうたんと杯を持つ姿、手を組む姿等で表され、男女和合がもたらす陰陽合体の呪力が災いを退けると考えられたのかもしれませんが。双体道祖神は長野県に最も多く見られ、二番目に多い群馬県を経由して粕尾に伝えられたとも考えられています。

●十九夜塔

「日待」や「月待」の信仰に関わる石造物も多く立てられました。江戸時代から庶民に広がった日待は、特定の日に集まり日の出を待って拝む信仰で、粟野でも「庚申待」が盛んに行われ、青面金剛や猿を彫った庚申塔も多く立てられました。一方、月待は特定の月齢の月が出るのを待ち、その月を拝む信仰です。十九夜、二十三夜、二十六夜等があり、特に栃木県では如意輪観音を本尊とする十九夜信仰が盛んでした。粟野地域でも、十九夜を信仰する十九夜講が立てた十九夜塔を、集会所や公民館の敷地等に多く見ることができます。十九夜講は集落単位の女性のみで構成され、十九夜塔の前で安産祈願の十九夜念仏を唱えた後、当番の家に集まり十九夜の月の出を待ちました。農作業や家事に追われる毎日であって、年に数回あった十九夜講の集まりが女性たちにとって心安らげるひと時であったのかもしれません。

《参考文献》

『栗野の野仏』 栗野町教育委員会、一九九二年

『栃木県民俗資料調査報告書 第九集』 栃木県教育委員会、一九七三年



▲双体道祖神（発光路）

粕尾には文化財に指定された6体の双体道祖神があったが、令和元年東日本台風の際に鬼平双体道祖神が行方不明になった。

さまざまな石造物が、皆さんの家の周りにもあるかもしれません。
是非探してみましよう。



▲十九夜塔（口栗野）

釜場公民館の敷地に残る内の一つ。如意輪観音の下に十九夜、女人講中と刻む典型的な塔。



▲庚申塔（中粕尾）

寛政12年（1800）。庚申信仰を記念する石造物。森集落の田原神社境内に佇む1基。



▲男体山碑（下永野）

安政3年（1856）。石灰石に彫られた高さ3mに及ぶ碑。男体山登拝を記念して建立。

